

1 研究主題

生き生きと遊び、つながり合う子どもを育てために
～かかわる力の基礎を培うための環境構成の見直し～

2 研究の具体

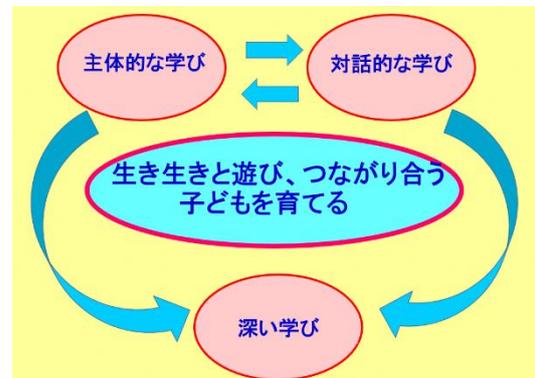
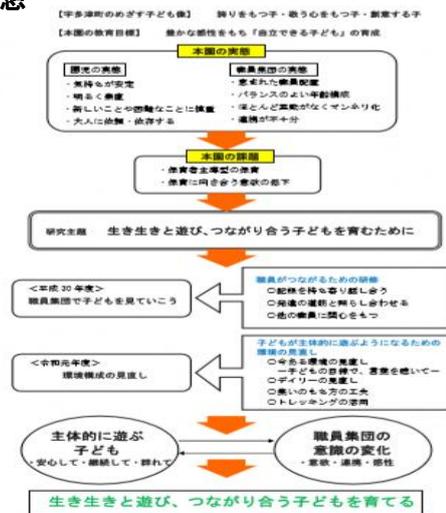
(1) 研究の内容

- 幼児の発達の道筋を理解し、発達に沿った環境構成を考え、環境の再構成を図ることで、人と関わり、つながることを楽しめる幼児を育てる。
- 幼児の人と関わる上での特徴を捉えた環境構成を行い、遊びこむ楽しさや遊びに向かう意欲を育み、生き生きと遊び、つながり合う子どもを育てる。
3歳児 安心・安定できる環境 4歳児 日々継続して使える環境
5歳児 自分の力で遊びを進める楽しさを味わえる環境

(2) 研究の方法

- ① 職員集団の姿が子どもの人と関わる力のモデルであることを自覚する。
- ② 記録を書き、読み返し、読み合うことで、幼児理解を図り、発達に添った関わりを保育者間で行い、次の日のかかわりにつなげていく。
- ③ 発達の道筋を理解し、発達に必要な体験ができるよう、今、ある環境(施設)を見直し、遊びに活用していく。
- ④ 遊びや生活のつながりをつくるために、デイリーの見直しを図る。
- ⑤ 子どもの姿から環境を再構成するヒントをもらえるよう、子どもたちと話し合う場(集い)を必要に応じて意図的に組み込む。
- ⑥ 園外での活動の見直し、トレッキング活動を行うことで三間の保障を図る。

3 研究の構想



4 研究を振り返って

- 記録を通しての学び合いで、みんなで子どもを観ていこうとする職員の体制が自然とできてきた。よりよい保育者集団が子どもにとって何よりの環境である。
- 職員の意識が変わったことで、保育者主導になりがちだった保育から、子どもを主体にした保育に変わっていった。子どもの生き生きとした姿に、保育の喜びを感じられる保育者集団になってきた。
- 発達の道筋を理解することで年齢に合った環境構成や援助ができるようになってきたことが、子どもが生き生きと、主体的に遊び込むことにつながった。
- 外部の講師を招き、継続して方向性(考え方)の研修をしたことは、マイナスと思っていた環境もプラスに置き換えられるようになった。
- 健全な心身の発達を保障していけるよう、心に届く発信の工夫をしていきたい。
- 子どもを変えるには、まず保育者自身が変わらなければいけない。子どもを温かく包むことのできる保育者集団であり続けたい。

